

# 令和5年度保育学科，服飾美術学科 試験問題

## 国語

(試験時間60分)

受験番号	
------	--

### 受験上の注意

- 1 机の上には、「国語」の「問題冊子」1部と「解答用紙」1枚とが配付してあります。  
「始め」の指示があるまでは、表紙の「受験上の注意」を読むだけで、「問題冊子」や「解答用紙」に手を触れてはいけません。
- 2 「受験票」を机の上に置き、筆記用具を準備しなさい。  
「下敷き」の使用は認めません。
- 3 これは「国語」の試験で、試験時間は「60分」です。
- 4 「始め」の指示があったら、「問題冊子」と「解答用紙」に「受験番号」を記入してから、解答にかかりなさい。  
解答はすべて「解答用紙」の所定の欄に記入しなさい。
- 5 試験の内容については、いっさい質問に応じません。  
後で問題を見て、印刷の不鮮明な箇所があったら、手を挙げて指示を受けなさい。
- 6 「やめ」の指示があったら、直ちに鉛筆などを置き、「受験番号」の記入漏れがないかどうかを確かめなさい。
- 7 試験開始後30分までは退室できません。
- 8 試験中の用便や試験開始30分以後の退室などには、手を挙げて指示を受けなさい。

問題一 次の文章を読んで、後の設問に答えなさい。

塾の小学生に向かってわたしは口癖のように言う、「子どもは遊ぶのが仕事だからね」と。妻は児童文学者・石井桃子のことばをハイシヤクして言う、「<sup>(7)</sup> いっぱいいっぱい遊んで、ほんのちよっぴり勉強する、それでいいのよね」と。

やれ勉強だ、やれピアノだ、やれ習字だ、やれスイミングスクールだと攻めたてられて、遊ぶ余裕のなくなっている子どもたちに、なんとか気楽に遊んでほしいと思つてのことだ。わたしたちの塾に通つてくることだつて遊び時間を削りとられることになるわけで、気のきく子は「塾やつてよくそんなこといえるね」と弱みを衝いてくるが、それでもやつぱり言いたくなる。子どもが遊ばなくなるのは、その子にとって不幸なことであるだけでなく、社会にとつても不幸だと思ふからだ。子どもたちののんびりと楽しそうに遊ぶすがたのない社会は、とうていしあわせな社会とは思えないのだ。

子どもたちを勉強や習いごと<sup>(1)</sup>に追いたてて、気楽に遊ぶ時間を奪い取るという風潮は、日本では高度経済成長のころから急速に広まつていまに続いているものだ。が、それは、<sup>(1)</sup> 経済的なゆたかさが増すとともに遊びが広く社会に受けいれられる、という大きな歴史の流れに逆行する事態だ。官公庁や企業では週休二日制が定着し、多くの人がとが余暇を利用して旅行やスポーツや趣味を楽しみ、そのためのサービスマシナや施設が確実に増大し多様化している。それが高度経済成長以後の日本の現実だ。仕事を休んで遊びに興じるのは悪いことでもなんでもなく、むしろ生活をゆたかにすることだと考えられているはずだ。

ただ、<sup>(2)</sup> そのように遊び自体に積極的な意味があると考えられるようになったのは、世界的に見て、高々ここ百年ほどのことだ。それまでは、遊びの対極にある仕事<sup>(2)</sup>が圧倒的に重要で、有用で、有意義なものと考えられていた。遊びは仕事に資するかぎりでは価値を認められるにすぎず、仕事を害する可能性についてはきびしい警戒の目が向けられていた。

(3) 当然のことだ。機械文明が発達し、労働の生産性が飛躍的に増大するまでは、社会は大多数の労働者の勤勉な労働によって生活必需品を供給され、安定した日常生活が維持されていた。体に支障を来すほどの重労働は避けねばならないが、健康を保てる限度内であれば、できるだけ仕事に精を出すことが、自分の利益にもなり社会の利益にもなる正しい生きかたと考えられていた。

A は美徳であり、A 人は立派な人だった。

そういう社会では、遊びは分が悪い。生産と直接に結びつかない遊びに高い価値は認められない。遊び人といえば、世の中をばみだした厄介者のことだ。遊びは美徳から遠く離れたところにあつた。

が、そういう社会でも、遊びなしには暮らしがなりたないことは自覚されていた。遊び自体を高く評価することはできないが、遊びを強く否定すれば、暮らしそのものが味気ないものになるとは感じられていた。どんなに仕事に打ちこんでも、仕事の合い間になんらかの遊びが必要であり、その遊びが仕事の意欲と能率を高める効果をもつことが知られていた。A が美徳であり、

仕事こそが暮らしの大きな部分を占める最重要事ではあるが、その一方、遊びのない、仕事一辺倒の生活は、なにかしらキユウクツな、不自然なものと感じられた。遊びは生活のリズムを狂わせ、仕事に支障を来す恐れのある、要注意の営みではあつたが、人間の暮らしに欠くことのできない、いうならば人間の肉体が自然に欲求するような、そんななにかだつた。そんなふうな暮らしに深く根ざし、肉体の自然と強く結びつくものだからこそ、その危険性については十分な警戒が必要でもあつた。洋の東西を問わず、<sup>(4)</sup>度を越した遊興・遊樂を戒めることわざや寸言は数多い。

その多さにくらべると、遊びを主題として論じた哲学は寥々たるものだ。

(中略)

十九世紀までは、遊びは哲学にとって取りあげるに値する主題だとは考えられなかった。社会のなかに占める遊びの位置がそれ

ほど小さかったということだろう。特權的な王侯貴族は、狩猟だの乗馬だの登山だの園遊会だの宴会だのと、いまでいう遊びを楽しんでいたが、それは社会のごく限られた部分での営みだったし、人びとにそれが氣榮な遊びと意識されていたかどうかも疑わしい。当人たちもまわりの人たちも、それこそが王侯貴族の仕事だと考えていたというのが真相に近いようにも思える。

王侯貴族から地主、大商人、工場主、さらには貧しい農民、職人、商人、工場労働者に至るまで、その生活の大きな部分を仕事<sup>(ウ)</sup>が占め、遊びは仕事の合い間の小さな時間に細々と存在をゆるされるというのであれば、遊びに哲學的な目が向けられなかったのもやむをえなかった。哲學はもともと世事に疎い面をもつが、十九世紀までの哲學が遊びに無関心であったのは、むしろ、世情に忠実な心の動きだったといえるかもしれない。仕事を生活の中心において遊びを考えれば、遊びは限られた時間のなかにどううまくおさめるかがまず問われねばならず、遊び心はショウレイするよりも抑制するのが大切な心得となる。遊びの利点としては、仕事に疲れた身心を別の方向に向け、氣を紛<sup>(オ)</sup>らせ、明日への活力を生みだす、といった消極的なものしか考えられない。哲學が遊びを正面から取りあげないのは、仕事中心のそうした生活感覺によくかなうことだったのである。

生産性の向上によつて、そうした遊びの<sup>(カ)</sup>とらえかたが大きく轉換する。遊びにサける時間が大幅にふえ、遊び心の許容範圍が広がるにつれて、遊びの見かたに根本的といつていい變化が生じる。遊びはもはや仕事の付随物ではなく、それ自体が独自の意味と価値をもつものとなる。遊びを、仕事や労働とのかかわりのなかでしか問題としない視点は、過去のものとなる。遊びは仕事や労働と肩を並べる位置にまで引き上げられる。遊びは、息抜き、氣晴らし、元氣回復の手段、という次元をはるかに超えて、人間の生活そのものをゆたかにする独自の営みと見なされるようになる。遊びをどう仕事に役立てるかという視点にかわつて、生きることと遊びとがどうかかわるのかという視点が登場する。人間らしい生活と遊びとのかかわりが問題となるのだ。

(長谷川宏『高校生のための哲學入門』による)

問一 傍線部(ア)(イ)(エ)(カ)のカタカナを漢字に改めなさい。また、傍線部(ウ)(オ)の漢字の読みを平仮名で書きなさい。

問二 傍線部(1)「それ」が指す部分を四十字以内で本文中より抜き出し答えなさい。なお、句読点や符号も字数に含むものとします。

問三 傍線部(2)「遊び自体に積極的な意味がある」について、遊びの積極的な意味を十字以内で本文中より抜き出し答えなさい。  
なお、句読点や符号も字数に含むものとします。

問四 傍線部(3)「当然のことだ」の理由が書かれている部分の初めと終わりの五字以内で答えなさい。なお、句読点や符号も字数に含むものとします。

問五 三箇所の A には同じ言葉が入る。本文中より探し漢字二字で答えなさい。

問六 傍線部(4)「度を越した遊興・遊樂を戒めることわざや寸言」を次の①～⑤から一つ選び答えなさい。

- ① 過ぎたるは猶及ばざるが如し
- ② 虎穴に入らずんば虎子を得ず
- ③ 季下に冠を正さず
- ④ 一寸の光陰軽んずべからず
- ⑤ 艱難汝を玉にす

問七 傍線部(5)「消極的なもの」を、より具体的に端的に表している言葉を五字以内で本文中より抜き出し答えなさい。

問八 傍線部(6)「遊びの見かたに根本的といつていい変化が生じる」とあるが、その説明として適切でないものを次の①～⑤から

一つ選び答えなさい。

- ① 遊び自体が独自の意味と価値をもつものとなる。
- ② 人間らしい生活と遊びの関わりが問題となるようになる。
- ③ 遊びは仕事や労働と肩を並べる位置に引き上げられる。
- ④ 遊びは仕事に疲れた身心を別の方向に向け、明日への活力を生みだす。
- ⑤ 遊びが人間の生活そのものをゆたかにする独自の営みと見なされるようになる。

問題二 次の文章は、土佐から京に帰る旅の様子を記録した「土佐日記」です。これを読んで後の設問に答えなさい。

十九日。日悪しければ、船出ださず。

二十日。昨日のやうなれば、船出ださず。

みな人々憂へ嘆く。苦しく心もとなければ、ただ、日の経ぬる数を、今日幾日、二十日、三十日とかぞふれば、指もそこなはれぬべし。いとわびし。夜は寝も寝ず。

二十日の夜の月出でにけり。山の端もなく、海の中よりぞ出で来る。かうやうなるを見てや、昔、阿倍仲麻呂といひける人は、唐土にわたりて、帰り来ける時に、船に乗るべきところにて、かの国人、馬のはなむけし、別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。飽かずやありけむ、二十日の夜の月出づるまでぞありける。その月は、海よりぞ出でける。これを見てぞ仲麻呂のぬし、「わが国に、かかる歌をなむ、神代より神もよん給び、今は上、中、下の人も、かうやうに、別れ惜しみ、喜びもあり、悲しびもある時にはよむ」とて、よめりける歌、

青海原ふりさけみれば春日なる三笠の山に出でし月かも

とぞよめりける。かの国人、聞き知るまじく、思ほえたれども、言の心を、男文字にさまを書き出して、このことば伝へたる人にいひ知らせければ、心をや聞き得たりけむ、いと思ひのほかになむ賞でける。唐土とこの国とは、言異なるものなれど、月のかげは同じことなるべければ、人の心も同じことにやあらむ。

さて、今、そのかみを思ひやりて、ある人のよめる歌、

みやこにて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

注1 阿倍仲麻呂

遣唐留学生として入唐し、玄宗皇帝に仕える。帰国しようとしたが遭難し再び唐に戻り、帰国できぬまま唐で亡くなった。

注2 馬のはなむけ

送別の宴

注3 よん給び

お詠みになり

注4 上、中、下の人

上中下、全ての人

注5 三笠の山

奈良の春日にある山

問一 傍線部(1)「心もとなけれ」(9)「男文字」(11)「かげ」の本文中の意味を答えなさい。

問二 傍線部(2)は「指も痛んでしまうようだ」という意味です。どのような状況を例えたものか、説明しなさい。

問三 傍線部(3)「端」(5)「唐土」の古典語としての読み仮名を答えなさい。

問四 傍線部(4)「かうやうなるを見てや」について、どのようなものを見たのか、説明しなさい。

問五 傍線部(6)「飽かずやありけむ」(7)「聞き知るまじく」を口語訳しなさい。

問六 傍線部(8)について、次の中から最も適当な説明を選び、番号で答えなさい。

- ① ふるさとに帰りたいという切実な思い
- ② 山から上る月にもまして海から上る月の美しさへの憧れ
- ③ 別れの宴を開いてくれた友への感謝
- ④ ふるさとよりも異国の地に親しみを持つようになったうしろめたさ
- ⑤ いつまでたっても帰国できない苦しみ



問七 傍線部(10)「心をや聞き得たりけむ」と思った理由を文中より抜き出し、十五字で答えなさい。ただし、句読点も字数に含むものとする。

問八 二重傍線部(a)(b)(c)の「なる」の文法的説明を次の中から選び、番号で答えなさい。

- ① 断定の助動詞の連体形
- ② ラ行四段活用 of 動詞の連体形
- ③ 存在の助動詞の連体形
- ④ 形容動詞の連体形の活用語尾
- ⑤ 伝聞の助動詞の連体形

問九 土佐からの帰路の旅を記した日記の中に、阿倍仲麻呂の和歌を引用した理由を次の中から選び、番号で答えなさい。

- ① 阿倍仲麻呂が海から上る月を歌った名歌を旅先で思い出し、自分も同じ着想で海から上る月の美しさを歌い、敬愛する阿倍仲麻呂に贈ろうと考えている。
- ② 天候が悪化し帰路につけず人々のいらだちが大きくなる中、帰国の希望がかなわなかった阿倍仲麻呂を思い出し、彼と同じ海からの月の出の和歌を作ること own 不安を表現している。
- ③ ふるさと日本に思いをはせる時には忘れてならない山からの月の出の美しさ、異国の地ではそれを海からの月の出と言い換える表現に新しさを感じ、同じ着想の和歌を詠んだ。
- ④ 何十日も足止めをくらいつらく悲しい日々を過ごしてきたが、異国の地で帰国がかなわず亡くなった阿倍仲麻呂のことを考え、和歌を作り冥福を祈っている。
- ⑤ 旅するのは楽しいけれど、天候が悪化し港に長く留め置かれると手持ち無沙汰で天を恨みたくなるが、帰国できなかつた阿倍仲麻呂の気持ちを思い、自分はまだ幸せだと感じている。